

あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250-23
04(7182)
0861

「40周年記念誌」に是非ご寄稿ください。

発足40周年を記念して「40年誌」を作成します。短い文章でも構いませんのでお寄せください。

また会報7月号とともにお送りした「バガキ」については記載の上必ずご返送ください。

講道館機関紙『武道』が銅像建立記事を掲載

『武道』10月号(No.646)にシリーズ「武道ツーリズムの輪を拓けよう」の第12回に「嘉納治五郎師範が愛した我孫子の地を訪ねる」として嘉納治五郎先生銅像の記事が載ったので紹介する。筆者は(公財)講道館図書資料部次長津村 弘三氏。(以下は要約)

まえがき

令和元年10月28日、嘉納治五郎師範の誕生日に合わせ、ゆかりの地を巡るバスツアーが開催され、その一行約40名が、嘉納師範の別荘跡である千葉県我孫子市の天神山緑地を訪ねた。我孫子市の星野順一郎市長、青木章副市長、倉部俊治教育長、また我孫子市柔道連盟の下村好仁、海老原勤両副会長らの出迎えを受け、記念植樹が行われた。



嘉納師範を「大事な人」と称え、郷土での足跡を語り継ぐ我孫子の人々の取り組みとそれに伴う武道ツーリズムを紹介する。

1. 嘉納師範と我孫子

師範が我孫子に別荘用地を購入したのは明治44年(1911)だった。我孫子駅から徒歩10分ほど、眼下に手賀沼が広がる天神山と呼ばれる高台で、朝日、夕日に映え、西に高く富士山を望む地である。我孫子

に別荘を設けた理由は定かではないが、師範の次男、嘉納履正第3代講道館長が「(父は)趣味の一つとして風景のよい土地をあちこち買い求めた」と書き残していることから、手賀沼の美しい景観が気に入られたのが、一つの大きな理由であることは間違いないだろう。

(略)師範にとつて「臨湖閣」と名づけられたこの別荘は、日常に使うと同時に、思索のための場所であったようである。平生に使うとなれば、明治29年(1896)に開通した日本鉄道土浦線で上野ー我孫子間が約1時間30分と交通の便が良かったことも、我孫子を選んだ要因の一つだったろう。(以降省略)

2. 我孫子市の嘉納師範顕彰活動

我孫子市役所の市長室には、今でも師範が書かれた「擇道竭力」の書が掲げられている。また我孫子市立我孫子第一小学校にも師範揮毫の書、「力必達」と「以人為鏡」が残されており、郷土で過ごした偉人として、師範の業績と教えが子どもたちに伝えられている。我孫子市をあげて、師範が我孫子で過ごしたことを誇りと捉え、永く語り継ぐための功績顕彰活動に取り組んでいるのである。(略)

師範の銅像を我孫子市に建立する動きも始まった。初めに提唱したのは市民団体「我孫子の文化を守る会」(美崎大洋会長、以下「守る会」)の三谷和夫会長だという。(略)平成30年1月の臨時総会で、東京オリンピック開催の年であるとともに、師範誕生160年、我孫子市市制施行50周年、守る会発足40周年の節目の年である2年後の2020年完成を目指す建立計画の実施が承認された。(以降省略)

3. 嘉納師範銅像建立

(令和元年10月28日別荘跡に植樹、他省略)そして本年、この記念樹の後方に、市民有志の方々が郷土を愛する心の精華として師範像が建ち上がった。当初は4月15日に除幕式を執り行うことが予定され、上村春樹講道館長も出席する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、4月7日に千葉県を含む7都道府県緊急事態宣言が発出されたため、少数の主だった関係者による開棚式で披露された。(以降省略)

秋の特別講演会報告

オビシヤの謎を解く

「三本足のカラスの的からさぐる」

稲葉 義行

今年に入り、新型コロナウイルス感染の拡大により、「密着・密集・密閉」の三密を防ぐため、当会の主要な事業である史跡文学散歩・放談クラブ等が中止を余儀なくされてきました。九月に緊急事態宣言が解除されたことで、今回、入場制限をして半年ぶりに特別講演会として放談クラブを開催することになりました。

今回は、民俗学の萩原法子氏に「オビシヤの謎を解くー三本足のカラスの的からさぐる」と題して講演をいただきました。

まず、オビシヤの「ビシヤ」とは射するという意味で関東地方特に利根川流域に濃厚に分布する年頭の弓神事です。「お奉射」、「お奉社」、「お奉謝」、「お備射」、「お毘舍」、「お飛射」、「お非射」など様々な文字を当てています。オビシヤは年の初めに神社境内で行う的射神事と輪番のヤド(頭屋・当番の宿)による神様の受け渡し(の神事)が中心で、一年で最も重大な祭です。

神様の受け渡し神事は今年の当番(今頭・こんとう)から来年の当番(来頭・らいとう)に渡す非常に大切なもの「オトウ」で厳重な盃(こと)三杯飲み終わらないうちに盃を置いてはいけません。

笑つてはいけない等の約束事があります。(の後、各神社により、特殊な方法でオトウは引き継がれ、来頭は受けたオトウを一年間祀ります。

的射神事は三本足のカラス(太陽と兎(月)(我孫子地区はカラスと兎が多い)の的を射るものであり、的は何が何でも射当てねばならないとされ、

(写真)オトウを渡す 来当のハナ番の首にオンベを通す)





「とどめの矢」として手で持った矢を的に突き刺すこともあります。**（写真）**

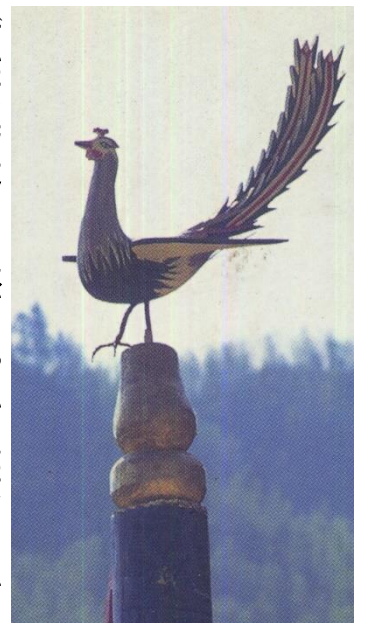
カラスが何故太陽と結びついたのかは、背景に鳥霊信仰があり、鳥の鳴き声は太陽を呼び出し、豊穡をもたらす天空の神とされ、「太陽を運ぶのは鳥」との考え方がありました。中国の揚子江下流域の河姆渡（かぼと）遺跡から「太陽を抱く双鳥紋」が出土しています。特に、カラスが太陽となったのは、まれに見る智能派の動物（四・五歳児の知能がある）で、遊びを楽しむ、火を恐れない（カラスが太陽や火をもたらしたとしている民族は多い）、この世とあの世（異界）をつなぐ仲介者（予知能力あり）、太陽の黒点とカラスの黒との類似等によりです。

また、前漢時代の中国湖南省長沙の「馬王堆漢墓」から出土した帛**（写真）**に描かれた太陽中のカラスは二本足で、その後、三本足となったのは、前漢時代以降



に普及した陰陽五行思想の影響で奇数を聖数とすることからです。日本では平安初期の皇居・宮中の年中行事や制度を漢文で記した「延喜式」には「三足鳥日の精也白兔月之精也」と書いてあります。

新年初めの最重要な儀式に、なぜ三本足のカラス（太陽）を射るのでしょ



（高い竿の先に東向きに鳥がとまっている鳥竿（ちようかん）。鳥霊信仰のシンボル 中国少数民族に多い）

その背景にあるのは、中国の太陽説話（十日神話）です。これは、古代中国殷の時代（紀元前十七世紀〜前十一世紀）の考えで、太陽も月も地球を中心として運行していたと考えられていました。地中に住む十個の太陽は、日々一つずつカラスに運ばれ天に現れては没し、十日で一巡すると考えられていました。十個の太陽につけられた名前が十干（じつかん）で甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸と云います。この十個の太陽が一巡すると初旬・中旬・下旬となり三巡すると一月となります。その十個の太陽が一度に空を駆け巡ったために大地の草木は皆焼け焦げて枯れてしまったので、天帝は弓の名人羿（げい）に命じて、九つの太陽を射させ、一日を残しました（射日神話）。残った一つの太陽は恐れをなして岩屋に隠れ、世の中は暗闇となつてしまいました。隠れた太陽は、鶏の鳴き声に誘い出



（太陽の木・扶桑（十の太陽が宿る木）三本の枝に三羽ずつ鳥が羽根を休め飛び立つのを待っている）

され平常に戻りました。（招日神話）この射日神話と招日神話はセットであり、その神話の意味するところは、人間が生きる上で最も恐ろしい早魃は宇宙の運行



筆者が福島で発見した射日神話絵図（福島県田村市）

が不順であることからたらされる。その余分な太陽を射落とすことにより、日々の太陽の運行を整える（射日神話）。さらに



（島根県隠岐 日月陰陽和合祭 4mの竿の先に金色の三本足のカラスが浮き彫りにされている）



ミヤオ族の射日神話を描いた藍染 現在のもの

と復活として捉えられています。日本にも射日神話の文書と絵図が残されています。例えば、宇佐八幡神社の百矢神事に関する相伝書・茨城県竜ヶ崎駒馬

神明社には日輪を射た伝説が残っています。

結びとして、オビシヤの真の目的は、余分な多数の太陽を射ることと太陽の運行を正常とし、農作物の豊穡を約束させるものです。柳田国男の「年占(としうら)」といった消極的な年頭の占い神事ではなく、年の初めに人間の生き死にをかけて宇宙の秩序を整えるという重大な神事であり、新たな年に太陽の順調な運行を祈念し、新しい暦のもと、村の時間と秩序の更新を図り、結果として豊作を祈る神事でもあります。

この説は、オビシヤの原初の目的、意味として「日本民俗大辞典」に新説として取り上げられました。しかしながら、柳田国男の「年占」説が明治以降永らく津々浦々に定着し続けてきたため、「オビシヤの本源の意味」が各方面に広く受け入れられていないのが実情のようであります。

(感想文)

「オビシヤの謎を解く」

「三本足のカラスの的からさぐる」を受講して

牧田 宏恭会員

10月17日、頭書の演題で「放談くらぶ」特別講演が開催された。コナ禍の中、半年余振りであった。

講師は萩原法子氏、氏は「オビシヤ」研究の日本の第一人者である。

私は「オビシヤ」という文字は、以前「我孫子市史研究会報」に掲載されていた論文と添付された写真で初めて知ることになった。以後、若干の興味を持っていたが、本日の講演でその行事のルーツ、目的、内容について、新しい知識を得ることが出来た。

「オビシヤ」は、農村部単位(地域等)で行われる年頭の弓神事で、北関東(多くは千葉県西北部、茨城県一部)を中心に古く(江戸時代頃?)から執り行われ、柳田国男は「年占いの行事で、弓を引いて的に当たる、当たらないで、その年を占う神事」と定義しており、この考え方が広く認知されていると聞いている。また「オビシヤ」は、漢字で「奉射」「奉社」「奉謝」「御備社」など、表現は様々、言い換えればそれだけ解釈が分かれてい

る証拠であろう。

我孫子でも弓神事のある「オビシヤ」は、新木の葺不合神社、日秀の将門神社、中峠の八幡宮、等々で行われているようだ。残念ながら、サラリーマン生活を送っていた我が身には全く関係のない、興味があっても当事者にはなれない世界の行事なので、今以上に理解を深めることは難しいことと思う。

萩原氏によれば、柳田国男の「オビシヤ」説には疑問があり、もっと大きい、深い意味をもつ神事であつて、多様性のある行事内容だと、その研究結果を力説される。今、各地にて執り行われている「オビシヤ」は、その本源を理解されないまま伝えられているのではないかと。

萩原氏は、「オビシヤ」で射る「的」にその神髄が在るのだと解説する。「的」は「同心円」や「鬼」が多い。だが本来の「的」は「三本足のカラスと鬼」、すなわち「太陽と月」と解く。(写真 三本足のカラスと鬼的ななど)



「三本足のカラス」が太陽となったのは、古く中国にあつた「鳥霊信仰」にあり「太陽を運ぶのは鳥である」との考え方が原典とのこと。特にカラスになったのは、カラスは知能派、火を恐れず太陽に向かって飛ぶ鳥、太陽や火をもたらしたなどの考え、また、カラスはこの世とあの世を繋ぐ予知能力のある仲介者であること、太陽の「黒点」とカラスの「黒」との類似性も考えられる。

中国・前漢時代の「馬王堆漢墓」に描かれている「太陽中のカラス」の足が、二本足から三本足になったこと

は、奇数を聖数とする「陰陽五行思想」によるものと解釈である。

日本でも「三本足のカラス」は多くは「鬼」と対を成して描かれ、その例としては、天皇の礼服・即位などの儀式や幟(のぼり)、各地の神事や山車・幟・鉾、校章など多数ある。

「三本足のカラスの的」を射るのは、中国の「太陽説話(十日神話)」にその原典(真髓)が存在していて、そこには「射日神話」と「招日神話」が並存する。

萩原氏は「三本足のカラス(＝太陽)」を射ることは「射日・招日神話」の意味を儀礼化した神事、これが「オビシヤ」であつて、「太陽に弓矢を射る(奉る)」ことで、太陽の新生を図り太陽の恩恵を乞い豊作を願った重要な神事である」と結論つけた。

三本足は、最近話題の「疫病退散を願うアマビエ」、「サッカー協会のマーク」、「庚申塔に刻まれているカラス」等々に見られ、また「的」の図柄にある「同心円」の中央の黒点はカラスの目＝太陽等々、地域により、神社により様々だが、共通性が存在するものだと。



(写真は日本サッカー協会のマークと高師北斎の描いた鹿島踊り図)

この講演を聞く前、私は、「オビシヤ」について、神事のようなだが、現在はその地域の関係者の「お楽しみ新年会」であつて、親睦会の一環として位置付けられている恒例行事程度の認識だった。

今回、私にとって「オビシヤ」を改めて学ぶ意味深い機会となった。萩原法子氏に感謝したい。

嘉納治五郎ゆかりのまち歩きを楽しむ

―市民のチカラまつり実施報告―

2020年市民のチカラまつり

実行委員 中條 信三

今年の「市民のチカラまつり」は予期せぬ新型コロナウイルスの発生により、これまでの対面形式から展示とオンラインにより開催されました。

今回の参加企画の大半がオンラインによる動画配信とZOOM講座で構成されている中、唯一リアル企画として「我孫子にずっと住み続けたくなるぶらり散策」(嘉納治五郎ゆかりのまち歩きを楽しむ)を実施致しました。「広報あびこ」に参加募集を掲載したところ定員20名の枠が直ぐに満杯となりキャンセル待ちとなるほどの人気イベントとなりました。

開催日の27日は懸念された天候も回復し、曇り空ではありましたが暑くもなく散策にはほどよい天気恵まれました。参加人員は2組のご夫婦を含め合計19名でした。3密(密閉・密集・密接)対策として2班に分け、A班(11名)を越岡講師にB班(8名)を村上講師に担当していただくことにしました。

我孫子駅南口のアビシル前から解散地点の旧村川別荘跡地を目指し約2時間半のコースをスタート。



A班・B班とも基本的には嘉納治五郎ゆかりの地を巡るコースですが、A班は嘉納後楽農園跡地や大衆キネマプロダクション跡地がある白山地区を、B班は我孫子宿本陣・脇本陣や角松本店がある旧水戸道中(現国道356)沿い地区を、



お二方が各々得意とするコースを案内していただきました。角松本店では美人の女将さんから嘉納治五郎ゆかりの書画や角松に代々伝わる数々の歴史遺産の説明を受けました。

出発後、約2時間後には天神山緑地で2班が合流し立派な銅像

を見学、建立に至るまでの経緯の説明を受けました。また、ここ天神山緑地ではオンライン開催の良さが発揮されたことからガイドの映像がリアルタイムでYouTubeに配信され多くの市民の皆様にご覧いただき、嘉納治五郎の存在を大きく印象付けることになりました。

この後、白樺文学館や志賀直哉居宅跡があるハケの道を歩き最終地点の旧村川別荘跡地に到着しました。旧村川別荘はコロナ禍のため3月から休館中でしたがこの日のために教育委員会文化・スポーツ課のご好意で臨時開館していただき、母屋及び新館に入館することができました。参加者の皆様は大変喜んでいらっしゃる様子でした。

約半日、全くトラブルなく滞りなく終えましたことに実行委員として安堵しました。

ご参加の皆様にはアンケートにご協力いただきました。主な参加目的は次の2点でした。

- (1) 我孫子のまちをもっと知りたかった。
- (2) 嘉納治五郎に興味があった。

これは参加者募集のタイトルが参加者の興味を引いたのではないかと考えております。そして、満足度については次のようなお声をいただきました。(要約)

- (1) 地元我孫子の歴史について詳しい説明を聞くことができてとても有意義でした。感謝しております。
- (2) 本当に有名人がたくさん来たり住んだりしているのに改めて驚きました。
- (3) 講師の越岡先生・村上先生の解説は見事でした。歩くのが少しもつらくありませんでした。
- (4) 我孫子が一段と好きになりました。

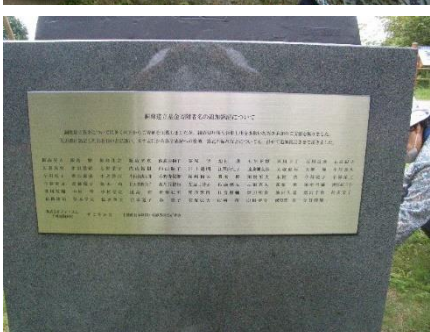
結びとなりましたが、この開催に当たり我孫子の文化を守る会様には講師の派遣を含め全面的にご協力賜りました。心から感謝申し上げます。

「手賀沼と民藝の心展Ⅱ」に協力

我孫子市市制施行50周年記念として開催された標記展(手賀沼アートウォーク実行委員会主催10月16日〜21日)に当会副会長伊藤一男氏が「我孫子に白樺村をつくった柳宗悦」のテーマで講演した。

嘉納治五郎先生の銅像台座に追加銘板装填

銅像建立後に、今回のプロジェクトの存在を知って、新たに寄附の申し出をされた方、また事務的ミスによる漏れや名前を誤表記した方のお名前について、銘板を追加し台座に取り付ける計画について、会報176号(2020年7月)に掲載しましたが、9月16日、台座の背面(北側)への取り付け作業が完了しました。



(寄稿)

我孫子の新名所

あびこガイドクラブ
会長 長峯 宣雄

嘉納治五郎銅像建立、本当におめでとうござい
ます。

建立にあたりましては、我孫子の文化を守る会が
中心に計画から大変な御苦労があったと思われ
ます。

特に美崎会長の人望、人脈、そして行動力に
感服、敬意を表します。

ガイドクラブも市内外からのガイド要請を受け、
嘉納の功績を平成7年から別荘入口でガイドし
て参りました。

(以下はその内容)

嘉納治五郎(1866〜1938)は、兵庫県生まれ
の教育家、柔道家。講道館を創設し、柔道の発展
に貢献。東京高等師範学校長、日本体育協会長、
IOC委員などを務める。

昭和13年エジプトカイロのIOC総会に出席、
第12回オリンピック大会(昭和15年)を東京誘致
に成功。帰途、氷川丸の船上で急性肺炎のため
死去。

この大会は第二次世界大戦のため中止となる。

嘉納は明治44年、天神山に土地を求めて別荘を
建てる。また白山の地に「嘉納後楽園」を開いた。
農園は20数年続いた。嘉納の書額が我孫子一小、
市役所、角松旅館などに残る。

平成26年4月1日より、別荘跡地は「天神山
緑地」として整備公開。

これからは、新名所銅像の前で、嘉納の素晴らし
さをガイドして参ります。

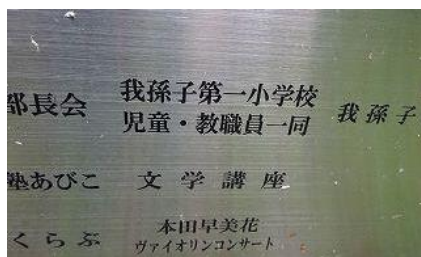
(我孫子第一小学校ホームページに嘉納像)

治五郎先生銅像 5年・6年算数科授業研究

土曜日、日曜日にアビスタで科学作品展が開催
されました。(略)

作品展の帰りに「嘉納治五郎先生の銅像」を
撮影してきましたので、紹介します。

4月の除幕式に児童会役員が参加するはず
でしたが、コロナ対応で中止になりました。
児童会で行った募金。しっかりとプレートに
刻まれています。



あびこだより 92号

滝不動で「竹灯籠まつり」(ポスター左上)始まる

三谷 和夫

滝不動(滝前不動ともいう)は、岡発戸字滝前にあ
る。平家の祖平高望(たかもち・第50代桓武天皇のひ
孫で平将門の祖父)が、京都から関東へ下った時に、手
賀沼の畔を通りかかり大きい滝がある沼の景色が気
に入り、守護仏としていた不動尊像をここに祀ったと
いう。この尊像は空海(のち弘法大師)が唐(中国)へ渡
る船中で彫り上げたと言われている。

初のお堂は嵐で破損したので、不動尊は我孫子市中
峠の不動尊の体内に納められているという(現在未確
認)。現在の不動堂は、江戸時代の文化十三年(一八
一六)に建立されたもので、入母屋造りの茅葺であつ
たが、昭和六十二年に銅板に葺き替えられた。その後
東日本大震災で相当な痛みを受け、修復されたもの
である。

境内には新四国相馬霊場三十六番札所があり、本
堂の左側に大師堂が建っている。文化四年(一八〇七)
の建立と見える。札所塔はさらに古く安永五年(一七
七六)願主観光音の銘がある。八十八ヶ所参りは今
も行なわれているが、手賀沼を見下ろす地にはかつて
は茶の接待所もあった。境内には志賀直哉の「矢島柳
堂」に出てくる藤棚が再視された。滝は今ほ怪しいが
龍頭から滝が落ちている。滝下には芭蕉の句碑
「清滝や 波にちりこむ 青松葉」

があり、取手の商人と岡発戸の石和田、渡辺の二人の
名がある。

滝不動の境内は竹林が繁茂し伸び放題となり、何
とか整備が必要と思われる状態が続いていた。一方
「住み良いまちづくり研究所」(代表理事米澤外喜夫
氏)の人たち(五〇人ほど)が竹林整備作業を計画し、
船戸の森で切り出した竹で竹灯籠を作り、ロウソクを
入れてけやきプラザで「竹宵」のイベントを実施した。



2015年からは滝不動一帯の竹林整備に本格的に取り組み、白泉寺や我孫子市の協力も得て事業は大きく前進した。昨年ついに滝不動で第一回の「竹灯籠まつり」を実施した。安全のためロウソクでなく小さい電球を入れた竹灯籠何百個を境内に並べ、夕方五時にカウントダウンして一斉に点灯、夜十時まで参拝客を迎えた。年末年始も続けた。満月の夜はなかなかの趣きあり、一月十三日希望者に竹灯籠を渡して終了。

本年も第二回「竹灯籠まつり」を実施予定。滝不動は平高望以来かつてない賑々しい年末年始の姿が見えよう。(12月6日(土)の「放談くらぶ」では、滝不動だけでなくその他の史跡もお話しします)

柳田国男、岡田武松そして伊勢イネ(その2)

戸田 七支(かずゆき)

ここで漸く松岡国男も初めて人並み以上の大きな家に住むこととなった。岡田武松は松岡国男の1年先輩とともに第一高等学校の学生として親しく交わることとなり、明治27年4月、筑波山、大洗、水戸、銚子へと4泊5日の旅行を共にする。両家及び武松と国男の関係が最も緊密な時期ではなからうか。

柳田国男自叙伝「故郷70年」にこう書かれている。「…夏休みには必ず会っていたがそのうちに長兄が厄介になつていた家主の小川さんの孫娘を細君に貰ったので、かえつてこちらの方できまりが悪くなつてあまり会わなくなつた。…」この記述について研究家は、理由で武松との関係が疎遠になるのはおかしい。国男の知り合いの娘と武松が結婚したならばむしろ一層親しくなつて当たり前であると思うのである。さらに武松が海老原みつと結婚したのは明治34年のことである。武松と国男の関係が疎遠となるのはそれよりはるか前のことである。明治27年頃にはその兆候が見られる。布佐へ移住してきた松岡家の元には島崎藤村、田山花袋、太田玉名、国木田独步など気鋭な小説家が訪れていた。彼らの初期の作品に岡田武松らしき人物が登場するがいずれも3枚目として意地の悪い人物

として描かれている。岡田武松、松岡国男の親密な関係は明治27年頃には既に終わっていたのである。

両者が疎遠となつたのは別の理由があつた。明治27年ごろより松岡国男は松浦辰夫の紅葉会に入り、新体詩を数多く発表し、注目を集めていた。その多くは「恋を歌つたものであつた。例をあげよう」たち出でて見ぬ夕暮れもなかりけり 君がすまいの まとのともし火これらにの詩について本人は実体験に基づくものではなく、観念上の絵空言であると弁明しているが、松岡国男初恋の存在は布佐の古老の間では広く知られていることである。その人の名前は伊勢イネ、明治15年生まれ、絶世の美女と言つてよからう。二人が何処で巡り合ったのか不明であるが、その時期は武松と国男が親密な関係を持っていた頃と重なる。国男のイネにたいする想いは募る一方であるが、何故か一歩が踏み出せない。端から見て歯がゆいくらいであつた。其の筈であるイネは武松の幼なじみであつたと言うのが筆者の考である。武松とイネは成田街道筋沿い500M離れた処に住んでおり、幼少の頃よりその存在を知る立場にいた。一方国男は他所からの移住者であり、武松より先にイネを知る事はあり得ない。想像であるが明治27年、筑波、水戸、大洗へ二人で旅行をした時、武松よりイネのことを聞いたのではないか？それから3年、この三角関係は曲がりなりにも続いたようであるが明治30年1月16日その幕を閉じる時が来た。

イネは絶世の美女であると同時に美人薄命の運命も備えていたのである。当時流行の肺結核に犯されていた。それもかなりの重篤で、青年達に感染しないようイネは取手の実家隔離されていた。1月16日は小正月で離れたところにいる人も戻つて来る習わしである。イネは自分の運命を悟り、二人の青年に別れの挨拶をすべく文を使わしていたに違いない。

内容は1月16日11時に布佐観音の境内でお会いしたいと言ふものでなからうか。指定通り二人の青年は家を飛び出した。そこで国男が目にしたのは一足先に境内に着いた武松がイネとしっかり抱き合つている姿であつた。国男はこの悲しみをどう耐えたらよいのか

と親友の田山花袋へ深刻な手紙を送つた。この手紙が館林の近代文学館に保存されており、三人の最後の様子が明らかになつたのである。三人が最後のデートをした3年後、明治33年3月9日イネ18歳の短い命を閉じた。墓所は布佐の勝蔵院にある。多分に筆者の想像が入り混じつたことをお許しいただきたい。

この日を境に松岡(柳田)国男は詩、文学の世界から決別し、実業に専念することとなった。翌年明治31年東京大学法学部入学を控えた8月、愛知県伊良湖岬へ旅行する。目的は稲作文化が朝鮮半島経由で日本に入つたのではなく、日本の真ん中である愛知(めぐむかぜの意へ上陸したのではないかと考えていた。後に「海上の道」と結実するのだが、学会の支持は得られなかった。この時のエピソードで伊良湖の恋路ヶ浜で椰子の実は漂着を見て島崎藤村にはがきで知らせた。喜んだ藤村はあの有名な椰子の実は詩を作り、大甲寅二の作曲と相まって大国民歌謡が生まれた。松岡国男のイネとの失恋が「椰子の実は」の歌が出来たと言えなくもない。岡田武松、柳田国男と二人の文化勲章受章者に愛された薄幸の美少女伊勢イネのことを忘れることは出来ない。(了)

プロジェクト報告

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌(恋の歌)

(その1)

逢ひ見ての のちの心に くらぶれば

昔はものを 思はざりけり

(043)

【現代語訳】

恋しい人ついに逢瀬を遂げてみた後の恋しい気持ちに比べたら、昔の想いなど、無いに等しいほどのものだったのだなあ。

【作者】

権中納言敦忠(藤原敦忠 906〜943)左大臣時平の3男で、母は在原業平の孫。参議などを経て権中納言

となつたが、琵琶の名手だったので琵琶中納言と呼ばれた。恋多き人で、大和物語などからも彼の生き方を
知ることが出来る。

プレイボーイというより恋多きロマンチスト、といった感じの人。京都・西四条の女性で、やがて神宮の齋宮(いつきのみや)となり神域へ入つて出会えなくなる人に恋もしている。逢えなくなるその日、敦忠はこんな歌を榊の枝に結び付けて女性に贈った。

伊勢の海の 千尋の浜に拾ふとも

今は何てふ かひがあるべき

伊勢の広い浜辺で探して見ても、あえなくなつた今は、何の貝(甲斐)も見つからない。むなしいだけだ。

(その2)

長からむ 心も知らず 黒髪

乱れて今朝は ものをこそ思へ

(080)

【現代語訳】

(昨夜契りを結んだ)あなたは、末永く心変わりはないとおっしゃいましたが、どこまでが本心か心をはかりかねて、お別れした今朝はこの黒髪のように心乱れて、いろいろな物思いにふけてしまうのです。

【作者】

待賢門院堀河(12世紀) 神祇伯(じんぎはく)・源頭仲(みなもと)のあきなかの娘で崇徳院の生母、待賢門院(鳥羽院の中宮・璋子(しょうし))に仕えて「堀河」と呼ばれた。息子の崇徳院は天皇在位後政略で退位させられたが、その時に待賢門院も追放され、堀河も一緒に出家している。

この歌は、百人一首にも歌がある崇徳院の命で作られた「久安(きゆうあん)百首」にあるもの。久安百首は、いくつかのテーマごとに歌を詠んで合計で百首にするというもの。この歌は、男が届けてきた後朝(きぬぎぬ)の歌に対する返歌という趣向で詠まれた。そもそも平安時代というのは男性

が女性の家に行つて一晩を明かすという慣習があった。「後朝」というのは男と女が一晩を明かした翌朝で、男が帰った後で女の許「昨夜はとても幸せだった」と一首詠んで贈る、という雅な慣習があった。それに対して女性が返したのがこの一首。

(その3)

夜もすがら もの思ふ頃は 明けやらで

ねやのひまさへ つれなかりけり

(085)

【現代語訳】

(いとしい人を想つて)夜通しもの思ひに沈むこの頃、夜がなかなか明けないので、(いつまでも明け方の光が射し込まない)寝室の隙間さえも、つれなく冷たいものに思えるのだよ。

【作者】

俊恵法師(しゅんえほうし)。1133没年不明(源経信(つねのぶ)の孫、源俊頼(としより)の息子で、3代続けて百人一首に歌が選ばれている。奈良・東大寺の僧で、京都白川の自分の坊を「歌林苑(かりんえん)」と名付け、歌人たちのサロンとした。「方丈記」の鴨長明などが俊恵法師の弟子として知られている。

今月の雑学(元歌をもじった狂歌など)

昔はものを思はざりけり

又してもじじとばばとのくりこと(繰言)に
むかしは物をおもはざりけり

あぢみでの後の心にくらぶれば

昔よかりしみめは物かは

吉良れて(切られて)の後の心にくらぶれば

昔の疵は痛まざりけり
注: 討ち取られた上野介の感慨。

歩みでの後くたびるる老いが身も

昔は道を苦しめざりけり

後悔を先に立たせて老いの坂

昔は物を思はざりけり

何事も贅沢になりくらぶれば
昔は物を思はざりけり

昔は物を思はせた乞食婆 注: 小野小町

乱れて今朝は ものをこそ思へ

二宵にすはんと思ふ地玉子の

みだれてけさはものをこそおもへ

「二宵」は二日酔い。「地玉子」は産み立ての卵

新枕心もしらず黒髪の

みだれて今朝は物も言はれず

明日咲くと思ふ朝顔夜風に

乱れて今朝は物をこそ思へ

なのりでとる手も知らず相撲取り

踏まれて今朝は物食はぬと思へ

夜通しの夫婦喧嘩に髪さへも

乱れて今朝は物をこそ思へ

乱れて今朝は御機嫌と御ぐしあげ

夜もすがら、ねやのひまさへ つれなかりけり

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで

あらうものなら世界くらやみ

傾城にふられ煙草の火は消えて

闇のひまさへ つれなかりけり

夜もすがら振られて明かすものならば

ねやのあるじやつれなかるらん

夜もすがら夜なべする夜の明けぬより

商ひのひまつれなかりけり

よもすがら物思ふ時の頬杖は

腕だるさぞしられざりけり

何ゆへぞ振られて床に唯一人

闇のひまさへ つれなかりけり

物思ふころや隣の餅の音

第二十五回短歌の会(最終採択の一首)

九月二十一日実施

芋殻焚き煙の中に母の顔
おがら
我は幼く母若かりし

芦崎敬己

知人の名今年の名簿に加わりて
原爆記念日白菊香る

村上智雅子

「外面がいいだけ」と妻他人に言ふ
そとづら
俺の本心分かつてたまるか

美崎大洋

真昼間は道路に出てはいけないと
聞いただるうに子とかげ千乾ぶ

納見美恵子

衰えぬ暑さの中に秋風を
知りて競ふか蟋蟀の声

飯高美和子

嘉納像三谷和夫が言ひ出でて
美崎大洋つひになし遂ぐ

佐々木侑

鬼百合のくわあつと開く真昼どき
地軸のきしみ聞こゆるらしも

伊奈野道子

不和なりし父にその子がわび言へば
父泣き子泣き和解をしたり

三谷和夫

眼裏に変わらぬ若き母浮かべ
まなうら
背を流すこと墓石洗う

藤川綾乃

空の色雲の形を日々変えて
そろそろ秋かマスクに馴れぬ

大島光子

文学掲示板

令和三年一月展示作品(文学の広場)

心あるごとく泳ぎてはまた並ぶ
鯉幾匹か沼藻のなかに

東京 清野 八枝

白色でなくてはならぬ道理など
なけれど馴染めぬ黒色のマスク

千葉市 岩崎 勝

雨の畑に夕暮ひとつ咲くを見て
一気に心明るくなりぬ

越谷市 田島 幸子

毬(い)が纏い己を護る栗の実に
尖りて生きし若き日思ふ

我孫子 山崎 日出男

一の倉沢の出会いに立ちて真正面に
仰ぐ岩壁巨人の如し

我孫子 藤井 吉彌

庭草に時雨の降りてコオロギの
鳴く声聞けば秋近づきぬ

我孫子 飯高 美和子

今後の行事予定

第139回史跡文学散歩について

「柳田国男の青春の地を訪ねる」(再掲)

「民俗学の父」と呼ばれた柳田国男は明治20年、布佐河岸の対岸・布川で医院を経営する長兄鼎を頼って来た。国男は医院の土蔵の蔵書を読み漁り、徳萬寺の「間引き絵馬」を見て、後の民俗学の原体験をする。2年後、両親一家が移住してくる。明治26年、松岡鼎は布佐に「凌雲堂医院」を開設した。布佐の岡田武松は第一高等学校の1年先輩で、国男は武松と親しく交わったが、やがてその関係は終わる。破綻の原因に伊勢イネの存在があったのではないかと想像する。皆様の参加をお待ちしています。

日時 11月14日(土)―小雨決行

集合場所・時間―R布佐駅改札前9時40集合

行程 竹内神社―勝蔵院―旧凌雲堂医院―イネの旧家などを散策。昼食後、(タクシーなど利用)利根町柳田記念公苑を見学(利根町生涯学習センター・大津さんの案内を受ける予定)。

◎参加費 会員無料 非会員五〇〇円
申込先 戸田七支

TEL 080-6527-3824

FAX 047-149-1648 まで

□「放談くさぐさ」

日時 12月6日(日) 14時〜16時

会場 南近隣センター(けやき9階)第1会議室
講演 「沼辺の史跡今昔・滝不動、鎌倉坂布佐、頼朝坂など」

講師 三谷和夫氏(我孫子の文化を守る会元会長)

◎参加費 会員無料 非会員三〇〇円

申し込みTEL&FAX(七八五〇六七五 佐々木(5ージ)の「あびこだより」を参照ください)

□プロジェクト「短歌の会」予定

第二十六回短歌の会

日時 11月24日(火) 13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

(終了後懇親会を予定)

□ 当会企画のイベント「川めぐりと木下の史跡散歩」は雨天のため中止となりました。

編集後記

偶に、不肖私めも講演を頼まれることがあるが、その内容は既に先人が研究したものをもそのまなぞるか、多少色を付けて話すというお粗末なものだが、萩原氏の「おびしゃ」の講演は本人が発想して研究し、学会で新学説として認められた内容を本人自らが直接話してくれたことに意味があり、貴重であり、滅多にない機会だった▲柳田国男といえば民俗学の世界では誰もが認める巨人で我孫子にもゆかりがあることから柳田説に真つ向から異議を唱えることは憚れると思うが、氏はそれを敢行し認められた。しかし我孫子でも、柏でも新学説が広まっていなかったことが大いに疑問だ。(美崎)